

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between Maternal Dietary Isoflavone Intake During Pregnancy and Childhood Allergic Rhinoconjunctivitis: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中のイソフラボン摂取量と子どものアレルギー性鼻結膜炎との関連:エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 千葉ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Nutrients

年: 2025

DOI: 10.3390/nu17050769

筆頭著者名: 楊 貴

所属 UC 名: 千葉ユニットセンター

目的:

大豆に多く含まれるイソフラボンは、女性ホルモンに似た作用や免疫への作用などがあり、胎盤を通過して胎児に移行するため、子どものアレルギーにも影響する可能性があります。しかし、妊娠中のイソフラボン摂取量と子どものアレルギー疾患との関連については十分に研究がされていません。本研究では、妊娠中の母親のイソフラボン摂取量と子どものアレルギー性鼻結膜炎の発症との関連を調べました。

方法:

妊娠中の母親のイソフラボン摂取量は、妊娠後期に実施した食事摂取頻度調査票を用いて評価し、イソフラボン摂取量別に4つのグループに分けました。また、保護者が回答した質問票を用いて、医師により診断されたアレルギー性鼻結膜炎の有無を評価しました。イソフラボン摂取量とアレルギー性鼻結膜炎との関連について、多重ロジスティック回帰分析により解析しました。また、男児と女児の間にこの関連に違いがあるかを検討しました。

結果:

子ども全体の解析では、妊娠中の母親のイソフラボン摂取量と子どものアレルギー性鼻結膜炎の発症との関連は認められませんでした。しかし、女児のみにおいて、妊娠中の母親のイソフラボン摂取量が高い群では、アレルギー性鼻結膜炎の発症リスクの増加が見られました。男児では、母親のイソフラボン摂取量とアレルギー性鼻結膜炎との関連は見られませんでした。

考察(研究の限界を含める):

本研究では、妊娠中の母親のイソフラボン摂取量が多いと、女児のアレルギー性鼻結膜炎の発症リスクが上昇したことから、妊娠中の母親が摂取したイソフラボンは、子どものアレルギー疾患発症に関与する可能性があると考えられます。また、その関連は、性別により違いがある可能性があります。しかし、本研究の限界点として、今回の解析では、食事摂取頻度調査票を用いてイソフラボンの摂取量を推定しており、摂取量を実際よりも少なく算出している可能性があることが挙げられます。また、アレルギー疾患を引き起こすしくみは様ではなく、他のアレルギーにも同じように影響するとは限らないため、今後は、他の小児アレルギーとの関連についても調査していく必要があります。

結論:

妊娠中の母親のイソフラボン摂取量が多いことは、アレルギー性鼻結膜炎発症のリスクが高いことと関連していました。また、この関連は女児のみで見られました。今後、アレルギー疾患を防ぐための適切なイソフラボン摂取量を知るためにはさらなる研究が必要であると考えられます。